

教師が『聖職』であり続けるために

教育部次長 富永 幸彦

教育行政に長く身を置いている私は、大津市内はもとより市外の学校を訪問する機会にも数多く恵まれ、今まで訪問してきた教室は相当数にのぼります。

若手教員の増加が顕著になってきていますが、年齢や経験年数に関係なく、一歩足を踏み入れただけで子どもたちの安心感が伝わってくる素晴らしい学級もあれば、授業がうまく成立せず明らかに機能不全を起こしている学級もあります。

この違いは、どこから生まれてくるのかを考えたとき、やはり当該学級に関わる教師の意識や姿勢に因るところが大きいと感じます。

私は、教師として特に自省しなければいけないことが3つあると思っています。

1つは、「事実」と『真実』は違うことを認識し、「事実」だけを見るのではなく『真実』を見極めているかということです。

教師は、「結果」の良し悪しだけで判断せず、それまでの『過程』を見取ることが重要です。また、私の尊敬する岩出雅之氏※は、「特に思春期の子に対する時、『背景』と会話しなければならない」と述べています。簡単な例を示すと、問題行動を繰り返す子には必ず何らかの原因があります。発達上の課題、親との関係や家庭事情、低学力…等々、考えられる要因を突き止め、そこに手をつけられない限り、根本的な解決に導くことはできません。

そういう意味では、教師には「共感力」が求められます。児童生徒や保護者と「情緒」をどれだけ共有できるか、また、一方的な指導や連絡では伝わらない「気持ち」の行き違いに対して個別にどのようにケアするか、そのような寄り添う意識や姿勢がまず必要です。

つまり、今、学校で見られる子どもたちの姿は、その子に関わる教師との関係性を反映したものと考えられます。

2つ目は、「柔軟性」を有しているかということです。

多様性が認められる社会になっているにもかかわらず、古い時代の硬直した教育観や学校観を押し付けようとする教師、マニュアルどおりに進めればよいと思いついてしまっている教師がいます。一方で、多様な価値観への対応をすべて自分の役割として引き受けようとするあまり疲弊してしまう教師もいます。

だからこそ、多様性を尊重することは大事にしながら、個に頼り過ぎない組織的な学校体制の構築が強く求められているのでしょう。

3つ目は、教師自身が、教育実践をどれだけ楽しんでいるかということです。

間違いなく教師としての力量が高いと思える人は、表情が豊かです。教師の「笑顔」が、どれだけ子どもたちを救うかを知っています。

市教委が繰り返し示している「教師こそが最高の教育環境」つまり『モデル』であることを改めて自覚し、共感力と柔軟性、そして笑顔を大切にして、教師が『聖職』であることを、もっともっと証明していこうではありませんか。

※岩出 雅之（いわで まさゆき） 帝京大学スポーツ医科学センター教授、帝京大学スポーツ局長

元 滋賀県内中学校教諭。その後、県立八幡工業高校に赴任した際、ラグビー部の顧問を務め、同校を7年連続花園出場に導く。高校ラグビー日本代表監督を歴任し、1996年より帝京大学ラグビー部監督に就任。全国大学ラグビーフットボール選手権大会において9連覇を達成した。

著書に「常勝集団のプリンシプル」等がある。

今年度の研修は全て終了いたしました。運営にご理解ご協力をいただき、ありがとうございました。
最終回の研修内容を一部、紹介します。

初任者研修(小・中)

第16回【2/14・2/16】「信頼される教師を目指して」・「閉講式」

令和4年度初任者研修の閉講式を行いました。閉講にあたり、初任者から「教師としての志」として、この1年間を振り返っての成果や成長、今後の課題や目標の発表がありました。また、大津市小・中学校校長会を代表して、2名の校長先生にもご出席いただき、「教師として期待すること」についてご講話いただきました。どの初任者も、辞令交付式で思い描いた理想の教師像に向けて、やり遂げたことや思うようにいかなかった現実、これから何をすべきなのかを、しっかりと考え伝えることができました。校長先生からのご講話も、今後の教師としての在り方について多くのご示唆がありました。



【初任者の声】

- *同じ初任者の先生たちのスピーチや校長先生方のお話から、「教師としてどうあるべきか」を再度考えるよい機会になりました。今年一年は反省点も多くありますが、よかったところはなぜよかったのかを振り返って来年度に生かし、様々なことに挑戦していきたいです。
- *校長先生のご講話にあった「教育のユニバーサルデザイン」は、今後の教師人生において最も大切な一つだと感じました。教育には普遍的な部分もあれば流動的な部分もあるということを理解しました。また、子どもや保護者とのつながりだけでなく、地域とのつながりをもっと意識する必要があると思ったので、今後の課題として取り組んでいきます。



教職2, 3年次研修(小・中)

今年度は、2年次研修の発表会を小学校は2月7日に、中学校は2月9日に行いました。3年次研修の発表会は、小学校、中学校とも合同で2月24日に行いました。

どちらの年次も年度当初に各自で決めた授業研究テーマについて、1年間の実践や成果・今後の課題をグループで協議しました。(小学校の教科は、2年次に算数科、3年次に国語科を指定)

パワーポイント資料を作成した発表や、画像・実物資料を持参しての発表もあり、どのグループでも熱心な協議が行われました。発表することで自分の実践を振り返り、他の受講者からの質疑応答により、授業づくりについて深く考える時間となりました。

【2年次教員の声】

- * (中学校) 同じ2年次の先生方の取組を聞くことができ、自分が今後さらに「深い学び」を実現するために様々な工夫ができるのだと、ヒントをもらうことができました。また、「個別最適化」と「指導と評価の一体化」については、授業の中でもっと意識していかなければならないと感じました。

【3年次教員の声】

- * (小学校) 他の先生方の発表と協議から、指導方法や工夫は様々あるが、それを実践することを目的とするのではなく、手段として用いることで子どもたちが本質的な学びの楽しさを得られるようにしていくことが、重要だと考えました。



2年次:中学校

若手教員育成学校園訪問を実施しています

大津市教育センターでは、主に経験年数が6年以内の若手教員(講師を含む)を対象に、幼稚園、小学校、中学校への訪問指導を実施しています。今年度は、幼稚園36人、小学校113人、中学校58人、合計207人の先生方に対して学校園を訪問し、保育・授業を参観して、保育・授業づくり、学級経営について助言を行いました。次年度も学校園からの要請に応じて訪問させていただきます。訪問期間は6月~2月を予定しています。ぜひご活用ください。

大津のキラリ★みつけた

今年度の初任者研修が終わりました。緊張した面持ちで参加した4月の第1回目の研修では、それぞれがキラキラした抱負をおもちになっていましたね。あれから約1年…。研修を終えてこの1年を振り返った言葉から、それぞれの奮闘や頑張りが見えました。少し紹介します。悩んだことや、乗り越えたことを糧として、後輩を応援できる先輩に成長して欲しいです。

1学期に比べると、子どもと一緒に遊ぶことが出来るようになりました。一緒にやってみることで遊びが分かったり、より楽しくするために必要なものが分かたりすることもありました。子どものやりたいことを受け止め、仲間として関わることで、より遊びが充実していくように、今後も子どもと同じ目線で物事を捉えていくことを大事にしていきたいです。

(幼稚園)

この1年を振り返ってみると、目の前のことに精いっぱい時間余剰もなくなってしまうことが多かったように思います。ふと我に返ったときに「このままじゃだめだ。」と立ち止まっては、また余剰なく時間が過ぎていく毎日を繰り返していましたが、この現状を変えるためには自信をもつことが必要と考えるようになりました。その為には勉強が必要です。成長し続け、自信をもって子どもたちの前に立てるようになりました。

(小学校)

この1年で、子どもたちは一人一人全く違い、認めることや褒めることの重要性、自分で分からないこと、できないことに対して「助け」を求めることの大切さなど、子どもたちや同僚の先生から多くのことを学びました。学んで終わりでなく、学んだことを生かして実際に行動していく必要があります。子どもたちにとっての中学校生活は一度しかないのです。今の自分にできる最大限の力で子どもと向き合っていきたいです。

(中学校)

中堅教諭等資質向上研修(小・中)

1月24日に最終回となる研修ならびに閉講式を行いました。京都産業大学柴原弘志教授にお越しいただき「教科としての道徳科の在り方」をテーマに、授業づくりや評価、ICT活用について実例をもとに実践的なご指導をいただきました。閉講式では、大津市教育センター所長より、勤務校だけでなく大津市の教育を支え推進していく人材となるよう、絶えず学び続ける教員であってほしいと講話がありました。

【中堅教諭の声】

*道徳の授業については、事前に教師が集まって教材やねらい、授業計画の確認をしていますが、私は「教材が伝えたいこと」「私が伝えたいこと」に視点が偏った授業をし、「まとめ方」をどうしようかと考えていたと気付きました。これからは、ねらいを明確に定め、生徒が認められ励まされ勇気づけられる評価とは何かを考えながら授業をしていきます。



ミドルリーダー研修

今年度、小学校9名、中学校3名の先生方が校長推薦により受講されました。

2月17日には研究成果発表を行い、1年間を通して研究・実践した成果を、グループ別で交流・協議しました。研修報告は、OIE-NET教職員向けWebページに掲載します。

【ミドルリーダーの声】

*改めて、次のステージのスタートラインに立たせてもらったように感じます。管理職をはじめ、校内の先生方からの信頼に報いるべく、目標と目的を明確にもった教育活動に努めます。この研修の意味、費やした時間、すべてを子どもたちに返せるよう、引き続き修養に励んでいきます。



OJT 推進リーダー研修

2月28日の第3回は、感染症対策や学校事情を踏まえ、オンライン形式での研修に変更しました。各校のOJTの実践例を持ち寄り、小・中学校別のグループで、自校の実践を振り返り、次年度に向けて成果と課題を交流する研修でした。小規模校、大規模校ならではの課題や OJT の時間確保の難しさ、研修方法の工夫など、様々な意見交流を行うことができました。

OJT 研修は若手教員の育成だけでなく、すべての教職員が学び続ける場として、今後ますます学校全体としての取組が求められます。他校の実践例を参考に、自校の実情に応じた効果的な OJT 研修を推進できるよう、市内すべての小・中学校の実践例を、**校支援ライブラリ**に掲載します。どうぞご活用ください。

1

2

Web ページには、その他にも参考になる資料が多数掲載されています。ぜひご活用ください。

教育センター図書をご利用ください

『貸出図書紹介』 コーナー

教育センターでは授業づくりや、園児・児童・生徒支援に役立つ図書を貸し出しています。その中から、一部ご紹介します。
その他にも、興味深い書籍を多数揃えております。
貸出の詳細は、教育センター所員にお問い合わせください。

(Tel 077-522-1910)



『ICT を使って保育を豊かに』
秋田喜代美・宮田まり子・
野澤祥子 編著
学陽書房 出版



『個別最適な学びを実現する
ICT の使い方』
蓑手章吾 著
学陽書房 出版



『家庭、学校、職場で生かせる! 自分と相手の
非認知能力を伸ばすコツ』
中山芳一著
東京書籍 出版

実際の保育・授業でできることなど、ICT の実践が満載です。
やりたいことが ICT を使うことで、より分かりやすく、面白くなります。
子どもの力を引き出すのは、大人の覚悟次第です。

夏の研修でもお世話になりました中山先生のご著書です。非認知能力といっても数多くありますが、3つの枠組みで整理され、伸ばすコツが「実践本」として展開されています。

「わたしたちの大津」編集委員会

今年度は、小学校3年生・4年生社会科副読本「わたしたちの大津」第18版（改訂版を含む）を活用した研究授業を実践しました。実践した授業は、3年生「市のうつりかわり」、4年生「自然災害から人々を守る活動」の2授業で、わたしたちの大津編集委員会において指導案を検討した上で、編集委員が研究授業を公開しました。本編集委員会では、昨年度に教師用指導書を作成し、Web上で公開しています。その指導計画を生かし、主体的・対話的で深い学びが実現することを目指して授業づくりを行いました。両授業の実際の様子、その成果と課題については本年度中にWeb上で公開する予定です。ぜひご覧いただき、指導の際には参考にしてください。



令和4年度 学校園教育研究委員会

保育・授業の参観を伴う研究会を実施しました。実際の子どもの姿から各学校段階の見方、考え方を交流し、資質・能力を確実に育むための幼・小・中一貫した支援方法を探ってきました。研究のまとめは、リーフレットにして各校園に送付いたします。ぜひご覧いただき、学校園の連携・接続の参考にしてください。

これからの時代に求められる資質・能力と学校段階における接続を探る
～調整力につながる『伝え合う場面』に焦点をあてて～



幼稚園の保育の様子
(遊びの振り返り)



小学校の授業の様子
(学級活動)



中学校の授業の様子
(国語科)

令和4年度 大津市教育センター研究員によるテーマに基づく研究

児童が主体的に関わり合い、互いに高め合う学級づくりの研究 —学級力向上プロジェクトを活用して—

研究員 増田 由香里

学校現場では、特別な支援を必要とする児童の増加や核家族化、急激な都市化による地域環境の変化により、社会性を身に付けられずにいる児童の増加が問題となっています。そこで、昨年度に引き続き、早稲田大学教職大学院教授田中博之氏考案の「学級力向上プロジェクト」を活用し、子どもたちの人間関係力を育成する学級経営の実践研究を行いました。今年度は中学年において実践しました。子どもたちと共に学級の課題を見つけ、その解決のための方策を考え、実行することで、子どもたちが互いに協力し、学級を改善するという目標に向かう姿が見られました。また、学級力向上のための目標を可視化し、子どもと共に担任も意識することで活動を継続することができました。

—学級力向上プロジェクト—

R (診断)	P (計画)	D (実行)	C (評価)	A (改善)
学級力アンケートの実施	アンケート結果を児童に開示 学級の課題の把握・改善策の計画	学級で改善策を実行	学級力アンケートの実施	さらなる改善策の計画・実施へ

【学級力向上策】 全員発表ができれば花丸をもらう、いいことみつけをし、帰りの会で発表する時間を守れたらビー玉を貯める、校外学習でのルールを学級全員で確認する
構成的エンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング